

●ボロディン：弦楽四重奏曲 第2番 二長調

化学や医学、とりわけ薬学の大家として相同に大きく貢献したアレクサンドル・ボロディンは、その本業があまりにも忙しく、自他共に許す「日曜作曲家」だった。作曲ができるのは“たまの休暇か病気のとき”だけとあっては、当然、作品数は多くない。それでもロシア・オペラの記念碑、未完の「イーゴリ公」をはじめ、粒揃いの傑作をいくつもこした。器楽曲では「中央アジアの草原にて」の人氣が抜群だが、それよりはむしろ2曲の弦楽四重奏曲が、彼の非凡な力量を物語る真に優れた作品と、言うべきだろう。いわゆる国民楽派の音楽家たちは、一般に弦楽四重奏曲という抽象的な音楽には大きな関心を持たない傾向がある——弦楽四重奏曲を一種の標題音楽として扱ったスメタナや、純音楽的な方向で多数の傑作を書いたドヴォルジャークといった例外はある——が、チャイコフスキーに近い西欧的な発想の持ち主でもあったボロディンは、ごく自然な流れでこのジャンルに取り組んだものと思われる。

弦楽四重奏曲 第2番の作曲時期には諸説があるが、48歳の年に、ボロディンには珍しい速筆で一氣に書かれたとする見方が有力。初演は1882年1月26日（ロ

シア藤)にベテルブルクで行われ、作品は愛妻のエカテリーナに捧げられた。2人はボロディンがハイデルブルクに遊学中、ピアニストだった彼女もやはりロシアから来独して知り合ったもので、この弦楽四重奏曲のロマンティックな雰囲気は、恋愛時代の甘いムードの思い出に由来するものとも言われる。

第1楽章 アレグロ・モデラート

曲を開始する切なくも美しい第1主題がはなはだ印象的。ソナタ形式だが、2つの主題の対照性は比較的薄い。

プロデューサー・ノート ■井阪 紘

私が日本ビクターでレコード・プロデューサーとして仕事を始めたのが1965年頃。1970年代の中頃からRCAのセクションに移って「ウィーン弦楽四重奏団」のレコーディングを担当するようになり、ウィーンにも年に一、二度、訪れるようになった。自然にムジークフェラインでコンサートを聴く機会も多く得、ウィーン・フィルの定期演奏会にも度々行った。

1974年にウエルナー・ヒンクとエーリッヒ・ビンダーの二人が第2コンサートマスターに就任する。私はウィーン弦楽四重奏団と録音していたから、ヒンクは仲間内で、その次にビンダーとよく付き合って仕事をした。それは、同世代という気軽さと共感があったからだろう。

第2楽章 スケルツォ アレグロ

どちらもワルツ風の趣を持つ2つの主題が繰り返される、やや変則的なスケルツォ楽章。

第3楽章：ノットウルノ アンダンテ

チャイコフスキーにおける「アンダンテ・カンタービレ」の場合とまったく同じように、曲全体の知名度をぐんと押し上げたこよなく美しいノクターン。

第4楽章：フィナーレ アンダンテ〜ヴィヴァーチェ

2つの楽想が並列的に呈示される短い序奏のあと、それらの楽想を区切りのようにして展開されるヴィヴァーチェの主部となる。

ヘッツェル、キュッヒル、ヒンク、ビンダーという時代が永く20年くらい続いたが、ヒンクとキュッヒルが弦楽四重奏団を組織していて、この2つのグループが楽友協会のカルテット・ツィクルスと室内楽のツィクルスを担当して競い合って今日まで来たのだ。

その間、2002年に若いフォルクハルト・シュトイデが彼の名前を冠した「シュトイデ弦楽四重奏団」を組むまで、ウィーン・フィルの中の室内楽の最も中心になるべき弦楽四重奏団の後継者がいなかった。

確かに弦楽四重奏曲というジャンルには、膨大なレパートリーがあり、それを専門として存在するグループに対抗するには、ウィーン・フィルとオペラという2つの大きな責務をこなさなければならない彼ら

にとって、地道に繰り返し、繰り返しアンサンブルの練習をしなくてはならない、この形式の音楽を続けるのは根気がある大変な道であることも事実である。キュッヒル・カルテット(ウィーン・ムジークフェライン弦楽四重奏団)とピンク・カルテット(ウィーン弦楽四重奏団)の両者とも、よくぞ今日まで継続してウィーン・フィルの伝統を守りながら活動して来た、と敬意を表したいと思う。

初めてシュトイデ弦楽四重奏団の演奏を聴いた時、私には今までウィーン・フィルにあった弦楽四重奏団とは一線を画して、かなり新しいカルテット像として映った。

先ず伝統としてウィーン・クラシックであるハイドンから始まってモーツァルト、シューベルト、ベートーヴェンの作品をマスターするという時間がかかる修業を避け、それはおおい、ゆっくりと勉強するとして、今までキュッヒルやピンクたちが取りあげなかった、たとえばエネスコの弦楽四重奏曲等を自分たちのツィクルスに積極的に取りあげ、高度なアンサンブル能力を強くアピールした。

今も鮮やかに覚えているのは、シュトイデがウィーン・フィルのトップになった直後のウィーン・フィルの定期で、シノーボリが指揮して、新たにウィーン・フィルのトップになった若い2人、シュトイデとチェロのタマーシュ・ヴァルガ、それに若手ピアニストとして頭角を現していたゴットリーブ・ヴァリッシュの3人がソリストとして、ベートーヴェンのトリプル・コ

ンチェルトでお披露目のコンサートに登場した時の演奏で、いかにも若々しく新鮮で、引き締まった3人の颯爽としたソリストぶりに好感を持ち、すぐにこの3人をレコーディングで扱いたいと思ったほどだった。シュトイデは1997年、彼の盟友ローランド・パティツクとカメラータにベートーヴェンの「クロイツェル」ソナタを録音してデビュー。2006年、2008年と2回に分けてシューマンのヴァイオリン・ソナタ3曲の全曲録音も行っている。

第2ヴァイオリンは最年少のホルガー・グロー。彼はフォウグ夫妻の主宰するピアノ五重奏団の第1ヴァイオリンを務めていたので、一緒に何枚かのレコーディングをした。確かな腕前でこのグループを支えている。

ヴィオラのエルマー・ランデラーはヴェヒターのグループでカメラータにも数枚のレコーディングをしている達者な奏者で、ともかくよく弾ける。音楽も積極的に取り組み、シュトイデとの相性もよいようだ。

チェロのヴォルフガング・ヘルテルは派手ではないがよい音楽を持っていて堅実なプレーが光る。人物も温厚で4人の和の中心にいる印象を受ける。

ともかく、前途洋々のシュトイデ・カルテットは、いずればベートーヴェンやシューベルトといったウィーン古典派の録音も行うと思うが、まずは我々が選んだチャイコフスキーとボロディンの名曲の組合せで、このグループを世に問おうという目論みである。

プロフィール

2002年にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーで結成されたシュティエ弦楽四重奏団は、ウィーン・フィルという名門オーケストラから誕生した弦楽四重奏団の伝統を受け継ぐ弦楽四重奏団である。古典派から現代作品までにおよぶ60曲以上のオペラ作品と数多くの交響曲作品をレパートリーとするオーケストラ・メンバーとしての活動、さらに室内楽奏者としての活動は多忙を極めるが、素晴らしい相互作用を生み出している。

シュティエ弦楽四重奏団のレパートリーは、古典派からロマン派、さらに20世紀の作品や現代作品初演も積極的に行っている。また、様々な演奏家たちとの新たな出会いと共演を重ねることにより、幅の広いファン層から支持され、オーストリア国内にとどまらず、海外でも活発な演奏活動を行っている。

■ホームページ: www.steudequartettt.com

●フォルクハルト・シュティエ (第1ヴァイオリン)

1971年生まれ。1994年よりウィーン・フィルおよびウィーン国立歌劇場管弦楽団のコンサートマスターを務める。ベルリンにてウエルナー・ショルツに、ウィーンでアルフレッド・シュタールにそれぞれ師事する。オーストリア内外で室内楽及びソロ活動を活発に行っており、ウィーン・フィルのメンバーにより結成さ

れたウィーン・ヴィルトゥオーゼンのリーダーを2001年より務める。使用楽器はアントニオ・ストラディヴァリ (1718年製) をナショナル・オーストリア銀行より貸与されている。

●ホルガー・グロー (第2ヴァイオリン)

1976年ヴァイツ (オーストリア) 生まれ。グラーツのヨハン・ヨーゼフ・フィクス・コンセルヴァトリウムで学ぶ。卒業後はアルフレッド・スター、ライナー・キュッヒル、ティボール・ヴァルガ諸氏の元で研鑽を積む。11歳で州立青少年コンクール優勝。コンコルソ・インターレギョナレ2位。2000年にグラーツ交響楽団第1コンサートマスターに就任。2006年ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に入団。2009年よりウィーン・ヴィルトゥオーゼンのメンバーとしても活躍している。

●エルマー・ランデラー (ヴィオラ)

1974年生まれ。1996年にウィーン・フィルおよびウィーン国立歌劇場管弦楽団のヴィオラ奏者に就任。ヴァイオリンをヴラディスラヴァ・マルコヴィッチ、ミヒャエル・シュニッツラーに、ヴィオラをハンス・ペーター・オクセンホファーに師事。様々な室内楽活動を行っており、ベルヴェデーレ三重奏団、ウィーン・ヴィルトゥオーゼンのメンバーでもある。

●ヴォルフガング・ヘルテル (チェロ)

1975年生まれ。2000年にウィーン・フィルおよびウィーン国立歌劇場管弦楽団のチェロ奏者に就任。グラーツでヒルドグント・ボッシュに、ウィーンでヴォ

ルフガング・ヘルツァーにそれぞれ師事し、優秀な成績で卒業。2000年まで、ウィーン・フォルクスオーバーの首席チェロ奏者を務めた。

After a century of musical culture dominated by borrowings from the west, notably from France, the development of art music in Russia in the nineteenth century came to be dominated by the gradual emergence of a nationalist school of musical composition. Russian music grew out of a conflict between the more sophisticated and initially more fashionable art music imported from Western Europe, and a growing awareness on the part of Russian-born composers of the rich folk music traditions of their own country.

Peter Ilyich Tchaikovsky (1840–1893), the most significant Russian composer of the later half of the century, was also regarded as being among the most ‘Russian’ in regard to his musical inspiration, although he chose to work largely within characteristically Western musical forms and modes of expression. Next to his achievement as symphonist ranks his superb ballet music, not least among which is the ever-popular *Nutcracker*, written in 1891.

Tchaikovsky’s chamber music is less familiar to us for, in comparison with his rich contribution to the domains of symphonic, concertante, stage and vocal music, he left relatively little for small ensemble. A number of pieces for various instrumental combinations date from the early 1860s and include five isolated movements for string quartet, none of which he saw fit to publish. The three completed quartets, Opp. 11, 22 and 30, all date from his middle years, the earliest composed in early 1871, the last in early 1876. Despite his earlier small-scale attempts, they all

reveal complete assurance in working with the quartet medium, its limitations and strengths, and were significant works also in establishing his success internationally. The popularity they enjoyed during his lifetime has since lessened, admittedly, with the exception of the ever-popular *Andante cantabile* from the First Quartet. It remains significant Tchaikovsky composed only two further larger-scale chamber works after the quartets, namely the Piano Trio, Op. 50 (1882), and the String Sextet, Op. 70 (1892).

Tchaikovsky’s **String Quartet No.1 in D, Op. 11**, composed specifically for and first performed at an all-Tchaikovsky concert in 1871, thus occupies a significant place in his compositional output. Despite Tchaikovsky’s lack of models from within the Russian musical tradition, and despite occasional sideways nods in the direction of both Beethoven and Schubert, his use of the quartet medium here appears *sui generis*, richly textured, rhapsodic, yet never to an extent that comprises the formal structure; as the critic Laroche noted, a union of beautiful music with perfect form. This is most noticeably the case in the first movement, *Moderato e semplice*, where Tchaikovsky bends the narrow dictates of sonata form to suit his lyrical inspiration. An initial theme of gently urging, syncopated chords gives way to a multi-layered imitative texture of great richness, rising to heights of great fervour before resuming and uniting with the chords, now in the dominant, rising to a second lyrical climax heightened by an increase in tempo (*Poco più mosso*). The exposition is then repeated. The development section is dominated by the little rising five-note

motive that first became prominent at the *Poco più mosso*. It flows seamlessly into the recapitulation; the movement concludes with a brilliant and energetic coda, *Allegro giusto*.

The second movement is the much-loved *Andante cantabile*, remarkable nonetheless for its tender expressivity and simplicity, and use of motives redolent of Russian folk-music. The Scherzo's main theme alludes to Schubert's D minor String Quartet ('Death and the Maiden'); equally its tangled rhythms and shadowy Trio are quintessential Tchaikovsky. The Finale, marked *Allegro giusto*, surprises initially with its gentle opening, but builds with a delightfully playful sense of energy into a succession of rapturous climaxes, the main theme ringing out victoriously over the top of the ensemble. Without adopting Beethovenian accents to any significant degree, Tchaikovsky here betrays his complete absorption of the formal innovations of the master's Op. 59 quartets.

Along with Balakirev, Cui, Mussorgsky and Rimsky-Korsakov, **Alexander Porfiryevich Borodin** (1834–1887) can be numbered among the famous 'Five,' or 'Mighty Handful', as this group of Russian composers was first named by the critic Vladimir Stasov in a review of a concert of their works in 1867. The name stuck. Founded in 1862, these largely self-taught nationalist composers saw themselves following in the footsteps of Glinka. In their efforts to unite traditional Russian music with the dictates of Western art-music they saw themselves in opposition to the 'Conservatory tradition' symbolised by Anton Rubinstein, who founded the Petersburg Conservatory the same year.

Of the 'Five,' Borodin was the best trained as a practical musician, being a competent performer on four instruments and an avid player of chamber music. The illegitimate son of Prince Luka Stepanovich Gedianov and baptised as the son of one of his serfs, Borodin in fact grew up comfortably with both his parents and was educated by his mother. In order to secure her future, the Prince

later arranged for her to marry a retired army surgeon, and at 17 Borodin entered St Petersburg's Medical-Surgical Academy, but eschewed surgery for what turned out to be a brilliant career as a research chemist.

Borodin regarded his compositional activities as no more than a pastime, often composing and meticulously revising works for years at a time in the little free time he had available from his work. His achievement, and the influence it had on his peers and musical posterity, is all the more astounding. While significant and highly polished, his completed output was not large, comprising mainly the opera *Prince Igor*, three symphonies, the orchestral tone poem, a handful of songs and some chamber music, including a piano trio, piano quintet and string sextet, all dating from the early 1860s. The two string quartets followed many years later.

Borodin's **String Quartet No. 2 in D major** is remarkable in having been composed in 1881 in a single burst of inspiration; his first quartet, begun in 1875, had not been completed until 1879. Returning from a visit to Germany in July 1881, Borodin set out for the country house of a friend, fellow composer Lodizhensky, at Zhitovka, and in the only mention of the piece in all his correspondence wrote from there to his daughter and son-in-law that he had begun his second string quartet. We know little further about its compositional dates, except that it was completed by the middle of September, when Borodin began his return journey to Moscow.

It was first performed at a concert of the Russian Musical Society in St Petersburg in February 1882, the same quartet, led by Nikolay Galkin, that had given the première of Borodin's first quartet the previous season. Delayed by Borodin's inability to find time to transcribe it for piano duet (it was usual at the time to publish alternative versions of orchestral and chamber music for piano four-hands) the work was finally brought out by the Russian

publisher Belyayev in 1888.

Dedicated to his wife, who was a fine pianist herself, the second string quartet is said to affectionately evoke the couple's first months together in 1861 in Heidelberg, where Borodin had been sent to further his scientific studies. It is a gentle and almost homely work in all its four movements, opening with a remarkably relaxed movement that is not without its occasional shadows. The fleet-footed Scherzo moves into a waltz both exotic and at the same time familiar; the third movement, entitled *Nocturne*, is one of Borodin's best-known compositions. From the outset the cello, his own instrument, takes the initiative in presenting this most famous of love songs. The Finale brings the work to a climax that is fervent, but at no point harsh or strident.

©John A. Phillips, Adelaide 2011

STEUDE QUARTET

Members of the Vienna Philharmonic Orchestra founded the Steude Quartet therewith continuing a long tradition of string quartets formed solely of musicians from this famous Austrian orchestra. The interaction of intensive orchestra-playing (the repertoire ranging from more than sixty operas and all standard symphonic pieces to contemporary music) and chamber music playing proves to be advantageous to both. Starting with the classic-romantic repertoire the Steude Quartet gradually extends their field of work also to contemporary music and even world-premieres. The four musicians frequently invite guests to join in and perform quintets, sextets and other formations of chamber music ? a treat to both themselves and their regular audiences. Apart from touring in Austria and worldwide the Steude Quartet also enjoys recording their work for CD-productions (LEGARE).

Homepage: www.steudequartett.com

Volkhard Steude | 1st violin

born 1971, since 1994 leader of the Vienna Philharmonic Orchestra and the "Wiener Staatsoper" orchestra, since 2001 primarius of the "Wiener Virtuosen".

Studied with Werner Scholz in Berlin and Alfred Staar in Vienna. Many activities as chamber musician and soloist in Austria and abroad.

He plays an Antonio Stradivari violin (Cremona 1718, "ex Viotti, ex Arnold Rose"), made available by the "Österr. Nationalbank".

Holger Groh | 2nd violin

born 1976, violinist since 2009 with the Vienna Philharmonic Orchestra, since 2006 with the "Wiener Staatsoper" orchestra.

Leader of the Graz Symphony Orchestra from 2000 till 2006 and artistic director from 2004 till 2008.

Studies with Franz Diethard, Alfred Staar, Rainer Küchl and Tibor Varga.

Many activities as soloist and chamber musician, since 2009 member of the "Wiener Virtuosen".

Elmar Landerer | viola

born 1974, since 1996 plays the viola with the Vienna Philharmonic Orchestra and the "Wiener Staatsoper" orchestra.

Studied with Vladislav Markovic and Michael Schnitzler the violin, with Peter Ochsenhofer the viola.

Wolfgang Härtel | violoncello

born 1975, since 2000 cellist with the Vienna Philharmonic Orchestra and the "Wiener Staatsoper" orchestra, until 2000 solo cellist with the "Wiener Volksoper" orchestra.

Studied with Hildgund Posch in Graz and Wolfgang Herzer in Vienna, where he finished his studies with summa cum laude.